

「まだまだ現役」

傘寿の記念に観世能楽堂で「雲林院」を舞う

（能楽の稽古歴26年）

内藤良太（高8回）

禅林の鐘樓の鐘の音と本堂からの読経の響きは、少年の耳朶をうち、魂を揺振りました。「経」の韻律は七五調であります。能楽の「謡曲」のそれも七五調（8拍）でありまして、心地よい響きを伝えます。「謡」の上半句はゆつくりと、下半句は勢いをつけて進み、一句の内に波がございます。

「謡曲」に誘われ、「観世流」能楽へ入門

その少年（私）は、青年期には、鎌倉・円覚寺（臨済宗）の禅堂宇「居士林」に或る期間に亘り、参禅して、「無字」の公案をもって、朝比奈宗源禅師に接見し、それより数年後には、横須賀市長井の不断寺・本堂に投宿すること四十余日、この間、日夜朝暮に読経の響きの内に身を置いておりました。魂を捉える読経の響きこそが、「謡曲」へと、私を誘いました。その時期は三十路も半ば頃でこ

最深处は洵に神秘的、かつ夢幻的であり続けます。

師匠の前に正座すれば事態は「無」に一変

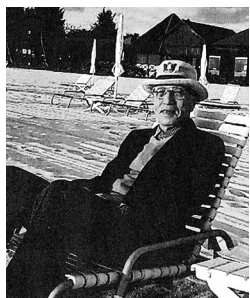
「謡」の発声には「ヨワ吟」と「ツヨ吟」がございます。「ヨワ吟」は柔らかく息を扱い、「ツヨ吟」は強く息を扱ひまして、概して優美な役柄には「ヨワ吟」で、勇壮な役柄には「ツヨ吟」で謡れます。その習い事の時は常に師匠の前に正座して、むずかしい文言と節回し（ヨワ吟・ツヨ吟）を一節一節、全て「口授」（口伝）で進みます。

この間、師匠には「絶対服従・一切抛擲」の状態（無）に身を置くことになりまます。日常生活では何かに就けては、「己」が、「己」が主導権を握りまます。それはいわば「心」にものが一杯に詰まっている状態に他なりません。

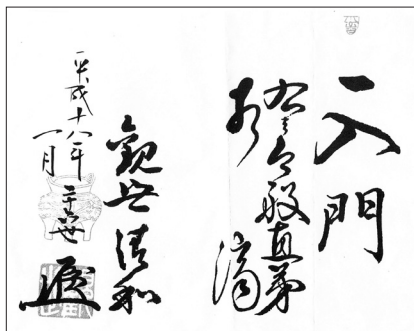
師匠の前に正



仕舞の稽古風景



●ないとう・りょうた
飯田市出身。薬剤師。塩野義製薬（株）学術部、協和発酵工業（株）研究開発本部を歴職。現在、整形外科専門病院理事、美容専門学校講師。某生活情報誌に「薬」周辺の記事を5年間連載中。この記事を基に年に4〜6回、首都圏で講演。



ございます。任意の謡曲の会「うとう会」に籍を置き、暫くは稽古を重ね続けてまいりました。稽古が進むにつれ、本格的に師匠に就いて学んでみようと意を固めまして、「観世流」能楽（観世流宗家二十六世・観世清和先生）への入門を願い、暫くの後、入門の許し（写真）をいただきました。

爾来、シテ方（職分）の藤波重孝能楽師を師匠と仰いで、今日に至っております。能楽の魅力は現代人の合理的思考からすれば支離滅裂でしょうし、荒唐無稽に思われることでしょう。がしかし、能楽にはその奥に何かがあり、座すれば事態は「無」に一変いたします。兼好法師も「徒然草」の中で、「虚空よくものを容る」と申され、心の中を「空」にすることをよしと説いております。稽古の間的心腑は「無」の情調で、心緒よいものにございます。

能楽の所作

謡に合わせて「仕舞」がございます。所謂「舞」でございます。舞の「構え」は体の重心を低く落とし、力を溜めながら立つ型でございます。「構え」は「女」「男」「鬼」などの役柄によって微妙に変化いたします。又、舞には「足の運び」（サシ込み、ヒラキ）が大切でございます。その動き（筋骨の使い方）は非日常的でございます。又、舞い方には「序の舞」（静かに、ゆつくり舞う）、「中の舞」（すこし速く舞う）、「男舞」（更に速く舞う）、更に「神舞」（最も速く舞う）などがございます。

仕舞には必ず「扇」が必要でございます。その意味するところは、扇を持って、神々と問答をする佇立ちにあると言われております。「扇」には「中啓」（先が広がった扇）と「静扇」（全体を閉じた扇）の2種類がございます。又、仕舞には「紋付袴」を着用いたします。「袴」で最も格が高いとされます袴地は仙台市に伝わる縞柄の絹織物の「仙台平」（アイヒラ）でございます。主な袴の種類には「馬乗袴」「行灯

袴」「括り袴」「長袴」そして「野袴」などがございます。

還暦、古希、喜寿、そして傘寿も舞う

私も「紋付袴」（仙台平）を着用いたしました。私も「還暦」の記念に「船弁慶」を、「古希」の記念に「三輪」を、更に「喜寿」の記念に「東北」を、そして「傘寿」の記念に「雲林院」を観世能楽堂の本舞台で、能楽師（シテ方）の地謡の謡に合わせて舞ったのでございます。（写真）

謡曲「雲林院」の「舞」（クセ）は、在原業平が語る「伊勢物語」の秘事、王朝の雅さを象徴する典雅で優美な、静かにゆっくりと舞う「序の舞」でございます。静かにして、ゆっくり舞うことは、「腰の構え」「足の運び」「扇の使い方」、いづれも非日常的でございます。



います。又、その舞台を見る所には「芝生」があったことが、今日の「芝居」の語源だそうです。舞台左側の「橋掛り」と「鏡の間」（役者が能面を付け、能装束を整え、出番を待つ所）を仕切るのが「揚げ幕」でございます。「幕」は五色に彩られておりまして、万有組成の五元素（火、水、木、金、土）を意味するとも、又、仏教の物質構成の「空、風、地、火、水」を表しているとも言われています。

能楽の演目についてもご説明いたします。能楽は室町時代に隆盛しました「茶道」や「禅宗」の影響を色濃く受けておりまして、「五番立」がございまして。即ち、

・「神」の初番目物（脇能物）―神が登場する能（高砂・養老）
・「男」の二番目物（修羅物）―武士の霊が登場する能（頼政・清経）

・「女」の三番目物（鬘物）―女性や草木の精が登場する能（羽衣）

・「狂」の四番目物（雑物）―他の組に入らない能（道成寺）
・「鬼」の五番目物（切能物）―鬼神や動物の霊が登場する能（土蜘蛛）

能（土蜘蛛）
でございます。

能楽の「シテ方」には「五流」がございます。その内、「観

体は金縛りの状態となります。今日も尚、私の舞は「舞」というには程遠いものがございます。

能楽の奥深さと小史

「能面」につきまして、少々触れてまいります。「能面」は変身の手段でありまして、その類型には「男の面」「女の面」「年の若い人の面」「年寄りの面」「鬼の面」そして「神の面」などがございます。楽屋で能衣装を着け終わつたシテ（仕手）主役は「鏡の間」で床几に腰掛け、「能面」に向かって精神を凝らします。「能面」を顔につけることによつて、役者の個性は消え、「能面」に象徴される役柄が舞台へと息づくのであります。一時期私は能面の魅力に取り付かれまして、プロの能面打ちに師事し、能面「小面」「白式尉」「万姫」などを打ちました。飯田高校8回生の卒業25周年記念行事の工芸展の部に「小面」を出品したことがございます。

次は能の「舞台」につきましてお話をすすめてまいります。舞台には四本の柱（シテ柱、ワキ柱、目付柱、笛柱）がございます。又、舞台正面の「鏡板」に描かれております「松」は「老松」と申します。能楽は元来、神社・仏閣の境内で演じられまして、そこは「神」が降りてくる場所とされ、「影向の松」があったことによるのだそうです。

世流」「宝生流」「金春流」そして「金剛流」の「四流」の源流は、室町時代の大和猿楽「四座」でございます。残る「喜多流」は、江戸時代に金剛座で活躍した喜多七太夫が、徳川秀忠・家光の愛顧を受けまして、新たに創設されました。喜多流はその歴史が浅いことから「半流」といわれて来まして、蕪村の俳句に「口切りや北も召されて四畳半」がございまして（北＝喜多、四畳＝四流、半＝喜多流、四畳半＝茶室）。「口切り」とは、初夏に摘んだ「茶」を入れて、神に献上する「壺」の「口」を切ることを指しております。「茶壺」といえば、人口に膾炙されている童謡として「ずいずいずっころばし」が有名でございます。

能楽は難解、故に挑み続ける

閑話休題。私は謡曲を学ぶことと並行して、謡曲の故事の多い夏目漱石の著作『我輩は猫である』『草枕』『虞美人草』などを読み直しております。漱石は「謡」に大変熱心でした。熱心の余り、よく「後架」（廁の異称）の中で謡うので、近隣の方々は漱石に「後架先生」と渾名を付けていたそうです。

これまで、能楽の稽古や全般のことなどを申しあげてまいりましたが、能楽は難解でございます。故に挑み続けておるのでございます。